

国語教育

石井庄司

一、展望の資料

雑誌「教育」(六八号)昭和三十二年一月は、一九五六年度の成果と反省の特集をし、国語教育については、大久保忠利氏が執筆している。そこに取りあげられた項目は、まず (一)、五六年国語教育は前進の第一歩を踏み出した、にはじまり (二)、日教組松山教研集会に現われた成果 (三)、東京の教研集会も前進した、(四)、日本作文の会五六年度大会 (五)、明治図書講座学校教育の七国語 (六)、春秋社、講座小学校の国語教育 (七)、各区分での注目すべき研究として、児童言語、読解、作文、文学教育、話し聞き、文法 (八)、五七年度の展望となっている。

国立国語研究所編、国語年鑑、昭和三十三年版(五月二十三日刊)には、第一部の展望に輿水実氏と筆者の二人が国語教育を書き、第二部の文献には、図書一覧、雑誌論文一覧、新聞記事一覧があり、国語教育に関するものも、なか／＼豊富である。私の展望は、一般的なもの (一)、教育課程の改訂 (二)、国語教育の研究 (三)、国語教育の実践 (四)、国語教育の実態調査 (五)、国語教育の歴史的研究 (六)、国語国字問題と国語教育となっている。輿水氏のものは (一)、戦後の学習指導形態の特色と問題点(調査報

告) (二)、読解と表現における文法の学習指導 (三)、作文の学習指導の前進 (四)、問題意識の喚起による文学鑑賞の指導 (五)、文の類型に即した読みの指導 (六)、話しことばの学習指導となっている、おもに学習指導法の方面を具体的に記しておられる。

国語教育関係の文献は、輿水氏も右の文中に述べておられるように、約一千と推定される。そのうち、以上のような文献に載せてあるものは、その半分にも満たず、まだいろいろある。それをまた見るのできるのは、極く一部分にすぎない。以下、なるべく重複を避けて、私が見ることのできた三十一年度の国語教育界の模様を書いてみたい。

二、幼稚園と児童文学

文部省は、昭和二十二年度の「保育要領」を改訂して、三十一年二月「幼稚園教育要領」として、三十一年度から実施することになった。これについて「日本経済新聞」は二月十四日に、「読み書きは教えぬ——幼稚園四月から教育を統一」との記事を載せ、「東京新聞」も「この四月からの幼稚園教育——読み書きは小学校で、義務教育の色どり、集団生活の出発点」という記事を載せた。

「幼稚園教育要領」(二月七日、文部省、フレールベル館、八円)によると、目標のうちに「ことばを正しく使い、童話や絵本などに興味をもつようになる」とあり、内容としては、健康、社会、自然、リズム、絵画製作と並んで「言語」の一項がある。言語については (一)、幼児の発達上の特質をあげ (二)、望ましい経験として、(1)話をする、(2)話をきく、(3)絵本・紙しばい・劇・幻燈・映画などを楽しむ、(4)数量や形、位置や速度などの概要を表わす簡単な日常語を使うとなっている。

こういう要望に応ずるためか、教師養成研究会幼児教育部会の「幼児の言語指導」(七月廿五日、学芸図書、一九〇円)が出た。執筆およびデイスカッションメンバーは、三木安正、阪本一郎、望月久貴、角尾和子の諸氏で (一)、言語教育の目標 (二)、幼児の言語の実態 (三)、幼児の実語の心理 (四)、言語指導の計画 (五)、言語指導の実際 (六)、指導上の問題点の各章から成っている。はしがきによると「幼児の言語生活は、話しことばが中心である。ところが書きことばの指導体系は、ずいぶん古くから研究されたのに、話しことばのほうは最近まであまり問題にされなかった。また就学後の教育と、就学前の教育との間に不当な境界線が引かれて、これを一貫する指導計画が考えられなかった。したがって幼児教育の担当者には、言語教育の基礎教養も指導技術の熟練も、さして必要としないという態度がひそんでいたように思われる」とある。そこで、これを一そう引きあげたいというのが、本書刊行の目的であるという。

久しく入手が困難とされていた矢田部達郎氏の「児童の言語」(五月三十日、創元社、二八〇円)の新版が出た。内容において

は、昭和二十四年の旧版と変りはないようであるが、表記のうえで改善が加えられ、大いに読み易くなった。もっぱら心理学の立場からの児童言語の研究であるが、とくに幼児の言語教育者にとっては必読の書といってもよい。

「父母と教師のための童話の正しい話し方」(十月五日、春秋社、二〇〇円)は、口演童話の実家としての安部梧堂氏の著述で、貴重な体験を新鮮な形にしたものである。童話の話し方への手引を序説として、童話の話し方と七つの要素、——「だれが」、「だれに」、「いつ」、「どこで」、「なんのために」、「なにを」、「どういふいい表わすか」について具体的に示してある。童話に限らず、国語教育のよい参考書といふことができよう。

最近の児童文学の研究は、すばらしいものがある。菅忠道氏の「日本の児童文学」(四月五日、大月書店、三八〇円)は、近代的な文化意識で児童文学が生みだされてから七十年におよぶ、その史的展開をまとめたものである。いたるところに、国語教育との対決が見えるのである。日本児童文芸家協会編の「教室の児童文学」(八月二十日、角川書店、一〇〇円)は、「作文の指導法」(石森延男)、「児童詩の指導」(村野四郎)等広い範囲にわたっているが、児童文化と教育の関係をはつきりさせるものである。「民話の発見」(一月三十日、大月書店、三五〇円)は、民話の会の人たちの編集であるが「民話の教育性」(益田勝美)、「子どもと民話をむすぶもの」(鴻巣良雄)など、民話と教育のことが取り扱われている。

幼稚園については、望月久貴氏の「幼稚園における国語能力表私案」(東京学芸大学研究報告七)があり、白石大二氏の「児童

語の問題」(国語学二十四号)がある。

三、小学校・中学校・高等学校

大久保忠利氏の「小学生のコトバ」(九月十五日、創元社、二九〇円)は、話しコトバの発達、コトバと知力の発達、入門期の言語指導一〇講の三部から成っている。第一部話しコトバの発達は、一年生→二年生、二年生→三年生等の順を追って、その伸び方を調べる。第二部、コトバの知力の発達は、話し合いの能力はどう伸びるか、読書力はどうか、文学作品の受け取り方はどうか、作文能力はどうか、コトバと論理の発達はどうかということが、具体的な事実について述べてある。第三部の入門期の言語指導については、前節と関係の多い、小学校の低学年の問題である。

言語能力の発達に関する調査研究については、国立国語研究所が昭和二十八年程度からはじめた研究で、すでに研究所報告として「入門期の言語能力」「低学年の読み書き能力」として出版されている。(国立国語研究所年報七、昭和三〇年度)

阪本一郎、大久保忠利両氏が責任編集となっている「講座、小学校の国語教育」が出た。その第一巻は「文法教育」(一月二十日、春秋社、二五〇円)で、大久保忠利、松山市造編となっている。文法教育の理論と文法体系と文法指導のしかたの二部から成り、編者のほかに、松延市次、前田静夫、小林喜三男、加藤隆詮の諸氏が執筆。第二巻は、「聞き読み教育」第三巻は「話し書き教育」、第四巻は「小学生の文学教育」、第五巻は「生活指導とマス・コミ教育」である。

前年度から引き続いての全日本国語教育協議会(時枝誠記・水実・渡辺茂・飛田隆・久米井束の諸氏の責任編集)の明治図書「講座国語教育」のうち第七巻「文学教育」(四月一日、三九〇円)、第一巻「国語教育と人間形成」(六月一日)、第二巻「国語の基礎学力」(六月一日)、第八巻「国語教育の進路」(七月一日)と順調に進んで完結した。また、大月書店の「講座日本語」は、第七冊として「国語教育」(一月二十七日、一五〇円)を出した。

講座ではないが、毎年研究集会の記録を刊行している全国国語教育研究者集会は、八月六日から三日間、信州の天竜峡で開催、そのテーマは「国語科学習指導形態の研究」であったという。記録は「言語経験と教室活動」(十一月二十五日、有朋堂、三二〇円)となっている。第一回は「人間形成の国語教育」(昭和二十八年)第二回は「国語学力——その学年基準」(昭和二十九年)第三回は「国語学習指導法の再建」(昭和三十年)であった。輿水実氏は雑誌「言語生活」(八月号)の「言語時評」で、国語教育界の最近の話題をかえりみるとして、この数年を逆にかけて居られる。それによると、昭和三十年は文法学習、昭和二十九年は、作文と文学教育、昭和二十八年は、読解力指導、昭和二十七年は、漢字力調査、昭和二十六年は、聞き方、話し方、それ以前は、カリキュラム作成とそのための実態調査であったという。もっともだいたい主なところを取りあげられたのであるが、なるほどと思われる。

(1) 文法教育

文法教育のことは、ここ数年来だん／＼と高まってきた動きで

あったが、この年度は、いたるところで、もつとも多く耳にしたテーマであった。雑誌「実践国語」は一月から三月まで引き続いて、「小・中高校の文法指導」を主題として特集した。一、二月号は、馬場正男、池田敏安、高橋孝雄、堀川勝太郎、松本滝朗、山本正格、内山直、熊代義一、松隈義勇、松村明、鴨岡幹夫、横山克巳、本宮敏治、上野薫、高木秀夫の諸氏に実践報告を求め、三月の特集では、さらに佐藤定義、増田三良、東郷隆、己野欣一、小林喜三男、片山英一、木下士郎、関口恒の諸氏の実践報告を加え、それに森岡健二、金田一春彦、遠藤嘉基、佐藤喜代治の諸氏に理論編を担当させて、一挙に問題解決に当たろうとする仕組みである。「問題は、一時の流行と考えることなく、国語教育の基本線の確立として、どこまでも明細化してまいりたいものです」とは、編集者のあとがきにあることばである。もとより、文法教育のない国語教育などというものは、ありえないのであって、今更問題となることさえおかしいわけである。しかし、文法教育の問題はなか／＼さかんである。

五月十七日、広島大学を会場として開かれた全国大学国語教育学会において、小・中・高校および大学における文法教育のことが、共同研究のテーマとしてとりあげられ、なお部会においても種々具体的な問題について論ぜられた。七月から八月にかけて、東京を中心として行われた日本作文の会、作文の会、実践国語の会、日本ローマ字教育協議会などでも、みな文法を取りあげている。私の出席することのできた各地域の研究会でも、たいていは文法であった。

こうしたところへ、九月二十三日、東京教育大学の国語国文学

会で「教育文法の諸問題」ということで討論座談会が開かれた。司会は大石初太郎氏で、講師は安藤新太郎、中田祝夫、岸田武夫、永山勇の諸氏であった。当日問題となったことは、主として、教育文法の大体の要因、解釈のための文法、現在の文法教育に対する批判、文法学説の相違ということであって、教育文法の範疇の問題、また、体系と領域の問題などであった。この記録は「国語」五巻一、二号（昭和三十二年二月四月二十日）に収載された。

ちょうど、それから二十日はかりたつて「国語学」第二十六集の誌上で、三十年の十月二十九日、京都で行われた公開座談会「文法教育の諸問題」を見ることができた。司会は遠藤嘉基氏で、講師は、大野晋、永野賢、林大、松井利男の諸氏であった。ずいぶんいろいろなことに論及されているが、だいたいは、まず、文法教育とは何かということから、小学校、中学校、高等学校の文法の範疇と段階について論ぜられた。何を、どこで、どのようにというところで、中学校の文語文法のこと、言語編と文学編のことや古典との関係、学説の対立、体系文法が機能文法かということ、最後は教授法のことにはまではない。

十月二十日、二十一日福井大学で開かれた、文部省国語課の国語教育研究協議会の主なテーマは文法教育であり、また、高知大学で開かれた同種の会でも文法教育が取りあげられた。しかし、このことはなお継続していくであろう。「機能文法はなぜ行われないか」という歎きもあれば「機能文法は出直せ」という批評も出る。（金田一春彦氏「言語生活」二月号、言語時評）

文法教育について特集をした雑誌には、「ことばの教育」第八

十号から第八十二号まで、七月から十月まで、(ローマ字教育会)。主な執筆者は、遠藤嘉基、竹岡正夫、時枝誠記、森岡健二、渡辺修、平井昌夫、倉沢栄吉、松井利男の諸氏。雑誌「教育手帖」九月号(日本書籍株式会社)は「文法の指導をどう扱うか」で、主な執筆者は、安藤新太郎、永野賢、石田佐久馬、平井太平、近藤徹、渡辺久次の諸氏。

文法教育についての活発な論議のなかに、具体的な指導書もいくつか発表された。その一つに鈴木一男、植西耕一両氏共編の「新しい文法学習」(四月十日、若草書房、一五〇円)がある。共編者の他に、巴野欣一、川淵勝男、小柴幸文、杉本恭彦、今本勝造、鍋木正雄、藤井和雄、樋口元男、郡琯諸氏の協力によって成ったもの由。副題に「文章の理解と表現のために」とあるように、内容は、文章の読みとり方、文章の表わし方、たくみな言い表わし方等になっている。この人たちの共同研究になるものとして、「小学校、中学校の文法学習指導項目」が雑誌「実践国語」九月号(穂波社)に巴野欣一氏の名で発表されている。

山根安太郎、三迫初男、堀芳夫共編の「表現の文法」(四月廿五日、学芸版出版社、各六〇円)の三冊がある。「単語と品詞」(上巻)から「文の構成」(下巻)に及ぶ行き方であるが、「用語をえらぶ」「文章の組立て」(上巻)とか、「はっきりした文章」「修飾のしかた」「叙述のいろいろ」「表現の技巧」(中巻)、「個性的な文体」(下巻)など工夫のあとがみえる。

文部省初等教育実験学校中間報告として、東京都墨田区立中川小学校の「ことばのきまり」(六月、騰写)がある。研究第一年度の報告であるから、まだ完成したものではないが、「作文に表わ

れた誤用例」や理解力のテストから、児童の言語生活の実態をつかみ、そこから文法学習指導の立場を確立し、指導の具体策を導きだした。文法学習指導の学年目標が示され、要素表具体例が立てられている。山口大学付属中学校の尾崎家連氏は、中学校文法学習書として「私たちのことば」(九月十日、騰写)を発表された。「私たちはどんな書き表わし方をしているか」「私たちはどんな話し方をしているか」などの項目から「日本語の特色」を考え、そこから「ことばのはたらき」と「ことばの発達」の二項に進み、中学生としての文法学習をしっかりとさせようというのである。こうしたものは、各地の実際家によって、なおいろいろ考案されているものがあることと思うが、たま／＼目にとまった一、二を紹介しておく。

(2) 作文教育

作文教育は、相変わらず活発に行われている。日本作文の会の機関誌「作文と教育」(百合出版)と作文の会の機関誌「作文教育」(作文の会)は、共に月刊で毎月出ている。その他、いろいろのものがあるはずであるが、今一、二の紹介にとどめておく。

西尾実、古田拡、仲田庸幸三氏の編集になる「作文の教育」(五月八日、習文社、四二〇円)は、故篠原利逸氏の追憶のための記念のもの。編集方針は、一つのテーマを二人の執筆者によって書く行きかたで、主として実践の立場の論文に対して、感想批評を述べる形になっている。第一部は「表現の味と筋」については仲田庸幸氏と西尾実氏、「話すことから書くことへ」については篠原佑一氏と古田拡氏、「作文と方言」については国村三郎氏と藤原与一氏、「読むことから書くことへ」については藤岡英夫

氏と滑川道夫氏、「要約と敷衍と構想」については古田弘氏と波多野完治氏、「作文と文法」については石田耕二氏と白石大二氏「作文の評価」については新居田正徳氏と岡本奎六氏。第二部は「小学校低学年の作文指導」については重見不二雄氏と鴻巣良雄氏。「小学校中学年の作文指導」については、土居清氏と国分一太郎氏。「小学校高学年の作文指導」については、大原輝夫氏と倉沢栄吉氏、「中学校の作文指導」については更科正道氏と石森延男氏。「高等学校の作文指導」については森元四郎氏と益田勝実氏。なお終りに、倉沢、白石、滑川、西尾、波多野、古田、西原の諸氏による座談会「作文の教育」がある。本論でとりあげられた問題のいくつかについて討論されたもので、参考になることが多い。

鹿児島県国語教育研究会の機関誌「鹿児島国語教育」第四号（六月二日）は、「作文指導」の特集である。北方綴方に対する南方綴方の荷い手であり、推進者であった、先輩の跡をうけて活発にはたらく会員たちの業績である。「作文教育課程論」（藁手重則氏）「作文教師論」（久木田義雄氏）「作文教育とヒューマニズム」（河野道治氏）「学習の綴方を語る」（副田凱馬氏）「南方綴方教育史」（吉嶺勉氏）をはじめ、実践記録等多い。

広島県文集委員会の編集にかゝる「この子をどう導くか文集にまなぶ第二集」（八月一日、広島教育会館出版部、非売）は、金子金次郎、松永信一、末田克美、空間一三、亀田正秋、佐藤熊太郎の諸氏が実際の作品について、入門期の指導、中学年の指導、高学年の指導、中学年作文の問題点、児童詩の問題点等について論評されている。作文の見方、導き方、また、文集に現われた一般の特徴とその指導のことなどよくわかって、いい研究であり指導

書であるといつてよい。

(3) 読解指導

読解指導の研究は、基礎学力の問題がさかんになるとともにさかんになってきて、今や読解と文法とは、もっとも多く取りあげられるテーマとなつてきている。それについて、「読解の欠陥とその対策」について実証な研究を重ねてきた堀川勝太郎氏の報告書（三月二十五日、宮城県教育研究所、非売品）が出た。小学校と中学校の実地について、よくその実態をきわめ、その対策を講じている。それは、文脈においての読みとりであり、文型にまで発展していかなければならないことになっている。雑誌「実践国語」十月号所載「読解の欠陥とその対策」は、その後の報告の一部分のようである。

倉沢栄吉氏著「読解指導」（九月三十日、朝倉書店、四八〇円）はA5判三三〇ページの大作である。(一)、読解指導の改善 (二)、読解指導の問題 (三)、読解力の本質 (四)、読解指導の過程 (五)、読解指導の具体策の五編から成り、実際的な例を多く取り入れて、実践例や具体策を解説ふうに説き、そこから読解指導の本質とその意義を明かにしたもので、範囲の広い課題である。その中で本書の中心は、読解指導過程の諸問題を取り扱った第四編と実用文、物語文、詩等各文種別による指導の具体策である。

問題意識の喚起のことは、数年前から西尾実氏によって提案されてきた問題であるが、八月開かれた日本文学協会の国語部会でも問題となつたところであった。高等学校部会では増淵恒吉氏の文学作品における形象の問題として、中島敦の「山月記」の取り扱い方について報告があり、それを中心に討議された。雑誌「日

本文学十一月号（未来社）に、その記録が出ている。私は、もう一つ十月九日台東区御徒町中学校三年の教室における増淵恒吉氏の「屋根の上のサワン」の取り扱い、およびその後の研究会の論議を思いだす。通読ののち、生徒から読後感を聞き、どんな点に心引かれたか、どんな箇所に興味を持ったかを発表させる。これを聞いておいて学習活動の進め方をきめる。まず作品の構成はどうなっているかをとらえさせる。おのおのの段落についての筋、人物のうごき、人物の考えなどのうえで、重要な叙述を抜きだし表にして概観できるようにする。これをもとにして討議させる。そこから主題の展開をはっきりさせ、次に文体の特徴に行き、主人公の運命などにつき、読者の問題意識と関係させながら解決していく。その間には、つなぎのことが問題になったり、コソアドをさぐったり、文法的の取り扱いもおこる。形象とは何かの問題も起ってくる。それは、もう文学教育の領域といつてよい。

(4) 文学教育

明治図書講座、「国語教育」の第七巻「文学教育」（七月一日、三九〇円）は、「文学について」丹羽文雄氏、文学教育における反省と開拓」安良岡康作氏、「文学教育の方法」鳥山榛名氏、「鑑賞指導」飛田多喜雄氏、「古典と文学教育」増淵恒吉氏をはじめ馬場正男、大胡源次、箸方勤、志鎌正雄諸氏の実践指導の論がある。

単行本としては鴻巣良雄氏の「文学教育の発見」（三月三十一日、一粒社、二六〇円）、はくぼくの会の「文学教育の探究」（八月二十五日、三一書房、二三〇円）、熊谷孝氏の「文学教育」（十

一月十日、国土社、三五〇円）などがある。鴻巣氏のものは、児童文学作品を小学校の教室で実践したものについての論究で「生活でとらえた文学」、「新しい文学教育の発見」、「文学教育を支えるもの」、「教室の波紋」の四章から成る。はくぼくの会のものは、若い教師たちの研究で、文学教育の構想、文学教育の発見、文学教育の展開、教師の文学の四部から成っている。熊谷孝氏のものは、長い間の論考を集めたもので (一)、問題史的展望 (二)、課題と方法 (三)、文芸学と文学教育 (四)、実践をめざして、小、中、高校・大学の場合 (五)、家庭と文学教育の七章にわかれている。付録に、小学校から大学教養課程までの文学教材五〇〇選がある。

(5) はなしことばの教育

「言語生活」一月号の「言語時評」で西尾実氏は、「話しことばの世紀が来た」といわれ、一般に話しことばについての関心は深くなり、ことばブームといわれるくらい、ことばについての本は多く出た。しかし、話しことばの教育は、まだそれほど進んでいない。七月五日国語審議会は総会を開いて、文部大臣に対する建議案を可決発表した。「話しことばの改善について」という見出しであるが、その第一条項に「話しことばの教育を特に学校教育において、いちだんと推進する必要がある」とした。教育課程その他の方面にじゅうぶん徹底させて、効果をあげてほしいものである。

国語東北の会機関誌「国語東北」第一巻第三号（三月三十日）は、話す聞くことの指導を特集し、石黒修氏をかこんでの座談会の記事や石井庄司の論文をかかげている。なお講座、「小学校の国

「語教育」には、第二巻に「聞き読み教育」第三巻「話し書き教育」があることは既述のとおりである。

四、その他

「国語学」第二十四集(三月三十一日)のはじめに、西尾実氏の「ことばの生態的考察」がある。ことばの機能、ことばの機構、ことばの形態、ことばの様式と、ことばの機能を生態的に把握しそれを分析してみると、近年、国語学で新しくとりあげられた文章の考に到達する。しかし、それはまたちがったところがあるとして、国語教育学の対象としてのことばの実態にメスを加えようとしておられる。これは、全国大学国語教育学会の紀要「国語科教育」第三集(三月三十日)の西尾実氏の論文「国語教育学に関する二三の問題」の内容に通ずるものであって、国語教育学の成立を期待せしめる重要な文献であると思う。

付記 同じものを二度書きたくないということ、しかも、ちがったことを書くのではないということ、少なからず苦勞した。まだまだ貴重な文献や研究を多く書き残していることをおわびする。
(七月十五日)

—東京教育大学教授—

国語	文(第26卷)	吾・六月	京都大学国文学会
文芸	復興(第2号)	吾・六月	文芸復興会
国語	語(第5卷)	吾・六月	東京教育大学
	合併号(第4,3号)		国語国文学会
言語	活(第70号)	吾・七月	国立国語研究所
エスペラント	ト(第38卷)	吾・七月	日本エスペラント学会
日本大学	文学部研究	年報(第7号)	吾・七月
英文	文法研究		吾・七月
国語	学(第2卷)		吾・七月
	学(第8号)		吾・七月
国文学	山辺道(第3号)	吾・七月	天理大学国文学研究室
研究	山麓の民俗	吾・七月	岡山民俗学会
国文	学(第2卷)	吾・八月	学燈社
	学(第9号)		吾・八月
英文	文法研究		吾・八月
			研究社

(八三頁より)